

資料

毛沢東思想学習の二つの例：倪志福
と李素文の場合

—— 訪中ノートから ——

大林洋五

1966年末、私は日中友好協会（正統）学習活動家代表団の一員として、中国を訪問した。これは、その時のノートの一部である。8年も前のノートを今ごろ発表するのは怠慢の至りであるが、中国を知るうえに今でもいくらか参考になると思うので紹介する。

中国の指導者たちは、最高幹部ばかりでなく基層幹部も、その大半が革命闘争、とくに抗日戦争と人民解放戦争（抗日戦争以前の革命戦争ももちろんであるが）において活躍し、その中で信望を集め指導者としての能力を示してきた人々である。しかし、それらの指導者たちも、しだいに高令となってきた。彼等のあとをつぐのは、どのような人々であろうか。

中国も60年代以降、接班人（チエパンレン、後継者）養成を最も重要な課題とみている。66年夏以降の文化大革命の目的もひとつは、社会主義の道を歩み、修正主義の道を歩まないように後代（あとつぎ、若い世代）に警鐘を鳴らすことにもあったと思われる。

そこに示された理想的幹部像は、恵まれた家庭に育ち、学校を優秀な成績で卒業し、役人となって大過なく勤めてゆく「三門幹部」（サンメンカンブー、家庭・学校・職場の三つの門をくぐっただけの指導者）とは異質なものである。中国共産党第9回全国代表大会、同第10回大会、第4期全国人民代表大会などで抬頭してきた新幹部は、ほとんどが生産、階級闘争（とくに社会主義社会における階級闘争）、科学実験の三大革命運動のなかで成長してきた人々である。三大革命運動は、もとより幹部養成のためにのみ行われるものではない。もっと広汎な全人民的な運動である。

しかし三大革命運動が、幹部のみの運動でなく大衆運動であるからこそ、そのなかから新しい指導者が輩出してくるのであろう。

ここに紹介するのは1966年12月に、倪志福氏と李素文女史とが、それぞれ我々の間に対しておこなった体験談である。毛沢東の著作学習ということが、彼等に何を意味するのかが明らかとなろう。66年12月といえば、林彪路線がはなやかな時期であり、毛沢東思想学習も、『毛主席語録』や『老三篇』をお題目のように唱えるだけという極端な単純化がおこなわれたともいわれる。ここに紹介する二人の談話にも、その影響が絶無とはいえないであろう。しかし、毛沢東思想が単なるお題目でなく、血肉になっていることが読者に示されよう。

倪志福氏は、当時、労働者出身のエンジニア（技師）であり、北京第一機械製作廠に所属していた。倪氏はその後、中国共産党第9期中央委員に、第10期には中央政治局候補委員となり、北京市委員会常務委員となっている。また北京市総工会主任にも就任し、75年1月開催された第4期全国人民代表大会では議長団の一員として最前列に座っている。

李素文女史は、当時、遼寧省瀋陽市の国営東方紅副食品会社の副政治指導員であった。李女史はその後、瀋陽市革命委員会副主任に選ばれ、中国共産党の第9期中央委員、第10期中央委員に再選され、党瀋陽市委員会常務委員、共産主義青年団遼寧省委員会書記でもある。第4期全国人民代表大会においては常務委員会副委員長の一人に選ばれている。

ここに掲載するのは私のノートであって、両氏の校閲を受けたものではないので、聞きちがい、訳し違いが、あるいは存在するかもしれないが、文責はすべて私、大林にある。
(1975年1月、大林)

1. 倪志福氏の場合

私は貧農の家に生まれ、上海の黄浦江の畔りで少年見習工となりました。貧乏と餓のなかに居ました。一人前の労働者になったのは解放後です。1953年に、抗米援朝のため、ある機械を溶接し、穴をあけ、接続する重大な任務が与えられました。その時に新しいドリルを作りました。このドリルは機械加工の面で使用範囲が大き

く、生産の効率と質が高く、党と国家に貢献することができました。このドリルは国家の開発項目に入りました。その後数年来、たえず改善し、一種から十数種類にしました。1964年には北京科学シンポジウムで報告しました。党と毛主席がもしなかったら私は今でも上海の浮浪児だったことでしょう。十数年をふりかえると、毛主席の著作を学び、ドリル作りの実際と結合してきた、といえましょう。

解放初期、私は上海の私営工場で働いていました。自覚は低く、ただ家族を養うために働いていました。三反五反運動において、私は労働者が資本家と面とむかって闘争するなかへ入りました。労働者が古い社会では奴隷であったが、新しい社会では主人となったことを知りました。その資本家は、三反五反運動が終って後、私を解雇しました。

旧社会では労働者は失業をおそれました。私の兄も度々解雇され、失業しました。しかし今度は、私は解雇されましたが失業はしませんでした。党は私を訓練班に入れて学習させ、再就職するよう配慮してくれました。私は張切りました。でも当時は党へ御恩酬しをするという考え方で、革命の道理はまだよくわかっていませんでした。

53年に北京へ転勤となりました。当時、その仕事を離れて他の仕事をやりたいと考えていました。今から考えれば動揺していた時期です。問題解決の緒口になったのは、党と総工会が毛主席の著作学習を組織していて、私もそれに加わり、『人民に奉仕せよ』『ベチューンを記念する。』『愚公山を移す』などを学び、思想もいくらかつつ進歩しました。その時、ある党指導者が、革命へ参加するかぎりは革命を逃げては駄目だ、といました。これは私にはショックでした。革命をやるのは解放軍の仕事だと思っていたからです。私たちの日常の仕事が革命だとは思っていませんでした。『ベチューンを記念する』を学習して、私は慚愧の至りでした。

私が11才の時、父親は病気で死にました。医者にみせることはできませんでした。それ以来、日本、アメリカ、国民党の支配下で見習工として働きました。このような体験は、私一人ではなく、全中国の幾万、幾億もの人々が同じような体験を持っているのだ、ということを考えました。現在自分は幸福な生活ができるようになって、世界にはまだ未解放の人がたくさん居るということを考えました。

この状況でドリルをつくりました。ちょうど53年、朝鮮の停戦直後のことで、数多くのものを修繕に持ってきました。ドリルの能率を高めることは焦眉の急となりました。ドリルの穴あけは、単なる穴あけではなく、アメリカ帝国主義打倒の戦争への参加でもありました。これも発明をした理由のひとつです。ドリルの穴をあける力は、思想の穴あけの力でもありました。

このドリルを作り始めた時、数多くの労働者、幹部、技術者が援助してくれました。北京の大学や研究所が協力してくれました（労働者・幹部・技術者の三結合、学校・研究所・工場の三結合）。そのため無事に実験を終えることができました。それとともに指導機関は、私に全国を巡らせ、更に多くの人に学ぶよう、私のドリルが更に完全なものになるためのよい条件をつくってくれました。

多くの曲り角があり、多くの失敗をしました。毛主席の著作は、失敗は良くない。しかし、弁証法的に言えば良いことでもある。それは壁にぶつかれば、多くの知識を得、失敗によって賢くなるからだ、と教えています。毛沢東思想は科学の科学です。毛沢東思想は高慢を戒め、小学生の態度で大衆に学ぶように教えています。1960年には東欧を訪問しました。東欧の技術者たちは、中国が社会主義建設で得た成果を理解しませんでした。私のドリルが一回転に1.2mm掘るといったら、速すぎる、鋼材は何だ、といいました。私が鉗工出身だと聞くと、どういう動機でドリルをつくったのか、といいました。私は社会主義建設のためだ、と返事をしてやりました。64年には北京科学シンポジウムで日本の科学者たちとも交流しました。彼等は私の話に耳をかたむけ、熱心に質問してくれました。私たちは社会主義建設の紅旗を、毛沢東思想の紅旗をおしたててゆかねばなりません。世界の先進科学の紅旗を押し立ててゆかねばなりません。ドリルは百年も前に外国人が発明したものです。毛沢東思想で武装した私たちが自力更生、奮発図強でどうして出来ないことがありましょう。私たちは敢然とやる、といっても盲目的にやるのではありません。科学的にやらねばなりません。たとえばドリルで穴をあける時には断鋸の問題があります。外国でもこの問題を模索しております。彼等は穴をあけることと断鋸の問題とを切り離して考えています。ドリル使用過程での断鋸の矛盾過程を見ず、他の事物との連関を見ません。私たちは内在的運動に目をつけ、断鋸を自然につくるようにしま

した。これによって能率を高め、品質を向上させ、耐久力を強くしました。ドリルを唯物弁証法的に見たわけです。

私がドリルをつくってきた時期を3段階に分けることができます。

第1段階は1953年に最初のドリルを作り出した時で、これは模索の結果でした。その結果、固い材料の上で使いやすいのはなぜか、という理くつがわかりました。この数年間は未自覚の状態です。

58年以降、7つのドリルをつくりましたが、半自覚状態でした。自分にわからぬ問題がいろいろありました。

60年以降2年間、党は私に専門的に学習する機会を与えてくれました。文化と理論を学びました。ばらばらだった感性的認識を、統一的に理論的に把握することができるようになりました。物質から精神への飛躍が生まれました。とくに『実践論』『矛盾論』を反覆学習し、必然の王国から自由の王国へと近づきました。1964年には3ヶ月間に10個のドリルをつくりました。理論が出来て、それで実践に入ったので大きな飛躍が可能になったのです。(ここで、さまざまな技術上の問題をどう解決したか説明しようとしたが、聴き手は私をふくめて機械オンチが多く、わからない顔をしていたため、省略した。興味ある方は1964年北京科学シンポジウム報告書に掲載された同氏のレジюмеを参照されたい)

たとえば得ることと失うこととの関係です。ドリルの刃は、真直ぐなほど良いというのが通説です。私達のは丸味を持っています。丸味があると作るのに手間がかかりますが、刃が長く、鋭さを増します。得るところが多く、失うところは少いのです。この失うところがあるのをおそれていては得るところはありません。ほかにも鋭さと強さ、高い効率と速度などの関係もあります。私達のドリルは大慶油田の搾井にも使われました。鋼板を堀るのと、地層を堀るのとは原理が同じだからです。

発明をしてから、党は私を工程師(技師)にしてくれました。私は常に自分の中のブルジョア思想と闘わねばなりません。革命にはてはなく、科学には限りはないからです。私は一生、毛沢東思想を学習し、革命をやり、紅いドリルになろうと思います。身体は職場にあっても、胸に祖国を思い、目を世界に開いてゆきたいと思

います。

〔質問〕毛沢東思想でなくても、合理的な思考、科学を用いれば出来るのではな
かろうか。

〔答〕私心を捨て公けを立てる、という考えが基礎にならなければ駄目です。私
は53年から56年まで研究しました。56年から58年まで研究を休んだ時、毛主席の
著作を学び、科学技術に終点がないと気づき、再び研究を続けました。満足、とい
うことは「私」という字と関係あります。力学や自然科学の学習は、もちろん必要
ですが、単に技術上の問題に止まってしまいます。もし私が思想面での努力をしな
かったら、56年に休息したきりになっていたかもしれません。

(1966年12月2日、北京市北京飯店にて)

2. 李素文女史の場合

副食品を売る店には、ありとあらゆる雑多な品物があります。

「人民に奉仕する」思想も突然に生まれたものではありません。だんだんと毛沢
東思想を学び、用いるなかで身につけてきたものです。旧社会で搾取・圧迫を受け
た人も、毛沢東思想学習以前は「你買我売」(あなたが買い私が売る、という対立的
とらえ方)の観念を持っており、「政治を突出させる」ことを理解していませんでし
た。商業もプロレタリアートに奉仕する。ということがわかりませんでした。

生産の発展と生活程度の向上につれて、商業の隊伍も拡大しました。初級中学や
高級中学(高校に相当)を卒業して入ってきた若い新しい店員たちの多くは、毛沢
東思想によって人民に奉仕しよう、と考えています。けれども少数の人は、この仕
事は将来の見込みがない、人のために使われるだけだ、と考えています。この思
想を持っていては、発展の意欲もなく、人民のためという熱情もわきません。この
問題をもって毛沢東思想を学習しました。仕事に貴賤があるのか、そのわかれ目は
どこにあるのか、『人民に奉仕せよ』『ベチューンを記念する』などをくりかえし学
習し討論しました。そして、社会主義社会においては仕事に貴賤はない、人の思想
によって貴賤があるのだ、誠心誠意人民に奉仕し私心をはさまぬ人が高貴で、私慾
のために人民の利益を損う人が卑賤なのだ、党が私にどの仕事をやれといっても全
力をあげてやり通し仕事を愛し、仕事に撒する、ということで、ほとんど解決しま

した。しかし、いくらかの人々は、自分は仕事を愛している、しかし人々は私たちの仕事を見込みのない仕事だという、といました。そこでまた毛主席の著作を学習しました。いかなる階級の人がいかなることをいうのか、階級の烙印をおされていないものはない、ことなった階級には異った観点があるのだ、と悟りました。封建社会では、良い土地、田を持っている人、家柄の良い人が見込みのある人であり、資本主義社会では役人、お金持ちが将来のある人です。社会主義社会では、プロレタリアートの立場では、すべてを党に、社会主義建設のために捧げる人が見込みのある人です。

商業、サービス業は、これを通して広汎な人民のために直接に奉仕できる仕事です。私たちの仕事は、毛主席の「誠心誠意人民に奉仕する」という言葉を、直接に実行できる職場だ、という考えに変わりました。私たちの仕事を立派にやるのは、見込みのある仕事だ、というばかりでなく、人民のために奉仕することにもなるのだ、きわめて大切なことをやっているのだ、とわかりました。そこで、どうやって金を儲けようか、という考えをやめ、どうしたら人民にもっと奉仕できるか、考えるようになりました。

たとえば、肉を売る職場の人は、炒めものによい脂身と、煮るのによい赤身というようにわけておいてお客を待つようにしました。しかし、まだ十分に奉仕していないと考え、ちょうどよく切っておいてお客を待つようにしました。しかしお客を観察していると、肉を買い、それから野菜を買い、野菜炒めを作ろうとしているのだと推察しました。そこで組合わせておいて一緒に売ることやってみました。大衆は、私たちのやったことが毛主席の著作を学習したからということには関心を払いませんでしたが、しかし私たちがやり始めると大衆から多くの提案がありました。たとえば、おかずをつくるものの組合わせを、幾種類か専門グループをつくっておいたら、とか等々と。このことは大衆の創意工夫を活かし、大衆の自覚も高めてゆくことができます。従業員もこの成功によって更に毛沢東思想を学習し、よりよく大衆のことを考えるようになりました。なまこや貝柱は、昔は大衆が生産したが、大衆は食べることでできないものだった、ということを知りました。そこでこれらを少しづつ皿に加え、大衆の満足を得ました。従業員にとって、これは麻煩

(余計な手間)です。しかし、これは弁証法的に考える必要があります。私たちがいくらか手間をかければ、多くの人が喜ぶ、これによって大衆は時間が節約でき、毛沢東思想を学習し、仕事を改善することができる、その利益は計りしれないほどである、と考えるようになりました。これによって祖国の建設を早め、祖国の強大化を助け、世界革命人民のためにつくすことができます。私たちが人のためにつくすのは、決して一部の人々ではなく、全中国人民、世界人民に奉仕することだ、と考えるようになりました。私たちが余分に労力をかけるのは、利益を余計にかせごうとするからではありません。

一切の事物は、決して一つの水準に止まっているものではない、と毛主席はおっしゃいました。私たちも、今の水準に満足してはならず、たえず改善しなければ、と思ひ更に調査を進めました。時間が無くて買物に來れない人はどうするか。四つの地区が私たちの商店からも、隣の商店からも離れています。そしてその4地区の住民の40%が夫婦とも勤務しており、買物が不便だ、とわかりました。そこで移動販売店をつくり、午後5時半に(冬は6時に)住宅へ行くようにしました。夜勤の人たちにはどうするか、と考え、朝のうちに全部準備できるよう按配しました。

大衆のなかへ副食品をよりよく送りとどけるだけでなく、大衆とともに毛沢東思想を学ぶことができるようになりました。従業員は、客が選りごのみをし、取換えるのに腹を立てていましたが、まだまだ人民に奉仕する心が足りない、と自己批判しました。大衆も、自分のことしか考えなかった、自分が一番良いのを買えば、他の人はどうでも、国家の利益などどうでも良かったのだ、ということに気がつき、自己批判しました。売買は各々が反対の立場からやっています。これは何千年も前からです。毛沢東思想学習によって、国の利益のために、社会主義のためにということで、売り手買い手の立場が一致しました。共働きでない人が手伝いにやってきました。そして共働きの人が30—40分の間集中して買っていった後で、自分達が買うようにしてくれました。私たちが風雨に関わらず車をひいて販売に行ったら、大衆は合羽や傘、ビニール布などを持って待っていてくれました。私たちが寒い時でも行ったら、大衆は湯袋を持って手を暖めるよう貸してくれ、教えてくれました。車で運ぶと中には痛む野菜などができます。大衆はその痛みかかったのを先に買っ

てくれました。今自分たちが買って行って使えば良いのと変りがない。残しておけば処理品にしなければならず国家に損害をかける、というのです。袋を節約しましょうと行って、とっておいて戻してくれるようになりました。

まだ一部の人々は不便です。3交替制の勤務で、私たちが車をひいてゆく時間にも居ない人たちです。そこで予約制を設けました。カードを配り、印をつければよいようにしました。大衆は私たちに信頼し、台所の鍵をあずけてくれました。留守に行ってカードを見て品物を置いて帰るようにしました。このようにして誠心誠意大衆に奉仕するように心がけると大衆はこういいました。あなたたちのやっているのが本当の社会主義商業です。あなたたちは、私たちの庭に、私たちの家に、私たちの心にやってきます。あなたたちが届けてくれるのは野菜のみではない、党と毛主席が大衆に関心をはらうというよい作風をも送り届けてくれています。私たちが食事をする時、自然にあなたたちのことが頭に浮かび、あなたたちのことを考えると自然と党と毛主席のことを考えます、と。

ある10才の子供から手紙をもらいました。その子の母親は、旧社会の苦しみを受け、気管支炎と関節炎で仕事に出ることができず、いつも家に居ます。私たちは、必ずこの家に立寄って必要なものを届けるようにしています。その子の手紙には、毛主席と党と、おかず売りのお姉さんたち、ありがとう。私はきっとあなたたちに学びます、とありました。

ある解放軍の兵は復員してきて、庭までおかず売りが来ているのを見て、仲間と連絡しあい、旧正月前の忙がしい時に応援に来てくれました。またある大学生は、休暇で帰省してきて、私たちを手伝ってくれました。私たちの送ってゆくのは、決していくらかの野菜だけでなく、党と毛主席の暖かい心、大衆への心配りを送ってゆくのです。私たちサービス員は、私たちの仕事を通じて、毛主席と党中央の政策を執行しているのです。帰って来る時は、車に売れ残りがある時も、売切れた時もあります。しかし、いずれにせよ、大衆の毛主席への熱愛を満載して帰ってきます。私たち商店員は、大衆と親密になり、毛沢東思想の学習を一緒にやるようにしました。私たちの経験交流会にも大衆を招いて意見を述べてもらいました。大衆はいいました。千も好い、万も好いといっても毛主席の指導が一番良い。どんな時代も毛

主席の時代ほど商店員が誠心誠意奉仕した時はなかった。千回も万回も毛沢東思想を学ぼう、千の困難も万の困難も毛沢東思想は克服することができる。千も万も忙がしくても毛主席の著作の学習を忘れるな、と。

〔質問〕李素文さんの個人的な経歴をお聞かせ下さい。

〔答〕学校は、解放後、18才になってから3年半行きました。54年に結婚し、子供は1人居ます。今33才です。今の仕事については1957年1月からで、毛沢東思想の学習運動をやり始めたのは58年からです。最初は少人数の仲間を集めて始めましたが、今では全員が参加しています。文化程度が低いので『老三編』（『人民に奉仕する』『ベチューンを記念する』『愚公山を移す』）は理解しやすかったし、とても心がひきつけられたからです。

（1966年12月11日 瀋陽市 遼寧賓館にて）